

演題：高齢、加齢にともなう歯科治療のパラダイムシフト

演者名：小坪義博

日付：2015年10月27日

Key word

1. 麻痺障害
2. 固定性から可撤性への変更
3. パラダイムシフト

我々が治療対象とする患者さんは、一般的には、精神的にも肉体的にも健常者である事が多いと思います。

しかし、日本は、高齢化社会へ急速に変貌しており、日本の高齢化率(65歳以上の人口割合)は、数年後に世界で初めて20%へ到達した後、2020年頃には約27%、ピーク時の2050年頃には約32%にまで達すると言われていています。

高齢化が急速に進む中で予想されるのが、多数歯欠損歯列を持つ患者さんの増加です。

そこで、機能回復を図るためインプラント治療を選択するケースも増えていますが、メンテナンスが重要なインプラント治療において、高齢の患者さんが容易に補綴物をメンテナンスできないことは致命的でもあります。また、超高齢化に伴い認知症や寝たきりなどの不遇に見舞われることも考えられますし、介護者によるメンテナンスも考慮しなければなりません。

そのため、今までに義歯の装着経験があるケースや、ブラッシングコントロールが不得手な人、あるいは手指に障害を持ってある方などは、可撤式の義歯を選択した方が適切な症例もあります。

さらに、インプラントを用いたアタッチメントは、義歯の安定を容易にするので、これからの治療法として広く普及して行くと思われれます。支持装置としてインプラントを使う事は、義歯の安定と咀嚼効率の向上に非常に有効であり、患者のQOLの改善をともないます。

今回のケースは、すでに他医院でインプラント治療を受けられています。その後、脳血管障害により手指に片側麻痺の障害が残り、口腔メンテナンスに不安を持たれ転院して来られた患者さんです。メンテナンスや修理の容易な治療処置を希望されています。このケースを通して、補綴処置の変更と、磁性アタッチメントの優位性について発表させて頂きます。宜しくお願い致します。